『東京大学言語学論集』**39** (2018.3) 399-406

モンゴル語の出動名詞派生接辞 -lt

—句への付加—

梅谷　博之
h_umeta2@L.u-tokyo.ac.jp

キーワード：　ハルハ方言　句からの派生

要旨

本稿は，モンゴル語ハルハ方言の派生接辞 -lt の特徴について報告する。-lt は動詞語基に付いて名詞を派生する接辞であるとされる。しかし，語ではなく句に付加される例も観察される。句に付加された例のうち，慣習化されて広く一般に用いられているものは少数であるが，話者によっては様々な句に -lt を付すことを認める。

1.　導入

1.1 本稿の目的

モンゴル語ハルハ方言（モンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されている；以下「モンゴル語ハルハ方言」を「モンゴル語」と記す）には，動詞から名詞を派生する生産的な接辞 **-lt** がある。-lt により派生される名詞は「主として《行為の過程，結果》，または（中略）《その行為に用いられるもの》等を表す」（塩谷 2007: 87）。例としては asuu-**lt**（尋ねる-NDS）「質問」，amž-i-**lt**（成功する-EP[1]-NDS）「成功」が挙げられる。この接辞が付加される単位は多くの場合，語基であるが，例 (1) のように句に付加される例もごく少数観察される。本稿[2]で挙げる例では，-lt が付加される句の範囲を “[　]” で示す。

(1)　[usan-d　sel]-e-**lt**
　　[水-DAT 泳ぐ]-EP-NDS
　　「水泳」

---

[1] 接辞がつく際に，母音や子音が挿入されたり，母音が脱落したりすることがある。amž-i-lt 中の “-i-” は接辞 -lt の付加にともなって挿入された母音である。

[2] 本稿は，JSPS 科学研究費補助金基盤研究（C）「モンゴル語の付属語の自立性に関する研究」（研究代表者 梅谷博之，課題番号 25370465）による研究成果の一部である。また，本稿の議論は 3 名のコンサルタント（1971 年ウランバートル生まれの男性，1979 年ウランバートル生まれの女性，及び，1995 年ウランバートル生まれの男性）から得たデータに基づいている。こうした方々，機関からのご支援・ご協力に感謝申し上げる。本稿での例文表記は，キリル文字による正書法に従い，それをローマ字転写したものを用いる：а=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ～tʃ], з=z [dz～ts], и=i, й=j, к=k, л=l [ɮ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [ɵ], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [ʊ], ү=ü [ʉ], ф=f, х=x, ц=c [tsʰ], ч=č [tʃʰ], ш=š [ʃ], ъ=”, ы=y [iː], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja

本稿は，(1) のように -lt が句に付く現象を記述することを目的とする。

1.2　モンゴル語の概略

モンゴル語は膠着型の言語で，基本語順は SOV である。母音調和の現象がある。

名詞は格接辞の付加により格変化する（主格はゼロ形態素）。また，格接辞の後ろに再帰所属接辞（-aa/-oo/-ee/-öö）が付加されることもある。再帰所属接辞は，それが付される名詞の指示対象が，主語の指示対象に属する・関係するものであることを表す。次の例 (2) では，名詞 aav「父」に奪格接辞と再帰所属接辞が付加されている。

(2)　Či　**aav-aas-aa**　asuu-g-aaraj.
2SG.NOM　父-ABL-REFL　尋ねる-EP-TV.OPT
「君は自分のお父さんに聞きなさい」

例 (2) では再帰所属接辞が奪格接辞の後に現れる例を挙げたが，aav-yg-aa（父-ACC-REFL）「自分の父を」のように再帰所属接辞は対格接辞の後にも現れうる。しかし，このように再帰所属接辞と対格接辞が共起しうるのは，一部の名詞（人称代名詞や親族名称など）に限られる。その他の多くの名詞に関しては，再帰所属接辞と対格接辞は共起せず，両者が出現することが期待されるような場合（直接目的語の指示対象が主語名詞句の指示対象に属する・関係するものである場合）には，対格接辞は現れず再帰所属接辞のみが当該の名詞語幹に付加される（nom-oo “本-REFL”「自分の本を」）。

次に動詞の屈折について説明する。動詞は，末尾に終止語尾，副動詞語尾，形動詞語尾のいずれかをともなうことで活用する。「終止語尾」という接辞は 1 つだけあるのではなく，それに分類される接辞は複数ある（副動詞語尾と形動詞語尾についても同様）。それぞれの活用語尾によって形成される活用形は「終止形」「副動詞形」「形動詞形」と呼ばれる。3 種類の活用形の機能は下の表 1 を参照。「形動詞」の「主節述語（文終止）」欄と「連用修飾」欄の記号「(+)」は，一部の形動詞形のみが当該の機能を有することを示す。

表 1　動詞の活用形の種類と機能

機能 / 活用形	主節述語（文終止）	連用修飾	名詞節形成	連体修飾
終止	+			
副動詞		+		
形動詞	(+)	(+)	+	+

本稿で触れるのは，表 1 で太字で示した「形動詞形」である（1.3 節で「名詞節」について言及する）。形動詞形により形成された名詞節中の主語は，主格，属格，対格のいずれかで現れる。

1.3 -lt に関する先行研究

先行研究では -lt は名詞派生接辞のリストに含められる形で簡単に言及されることが多い（Čojmaa 1997: 177, Önörbajan 2004: 39 など）。1.1 節で述べたように，-lt により形成される名詞は「主として《行為の過程，結果》，または一部，《その行為に用いられるもの》等を表す」（塩谷 2007: 87）。以下，塩谷 (2007) が挙げている例のうちからいくつかを引用する。(3a, b) は -lt により派生した名詞が「行為の過程，結果」を表す例に相当する。(3c, d) は -lt により派生した名詞が「その行為に用いられるもの」を表す例に相当する。

(3) a. xögž-「発展する」 → xögž-i-lt（発展する-EP-NDS）「発展」
b. xüs-「望む」 → xüs-e-lt（望む-EP-NDS）「要求，願い」
c. ilgee-「送る」 → ilgee-lt（送る-NDS）「小包」
d. oroo-「包む，巻く」 → oroo-lt（包む-NDS）「マフラー，巻くもの」
（塩谷 2007: 87）（引用に際してローマ字転写し，例の配列の仕方も変更した。また，グロス中の “EP”（介入母音）に相当する部分を引用元では語基に含めているが，本稿では語基から切り離して表記した。）

-lt が付く単位について明記している研究は（すぐ後に挙げる Binnick 1979 を除き）管見の限りない。先行研究で挙がっている -lt による派生語の例も，語を単位として付くもののみで，句に付加されているものは見当たらない。

ただし，変形文法に基づく Binnick (1979: 56–57) は，-lt の派生元として文が想定できることを指摘している。以下に Binnick の主張を簡単に紹介し，本稿との相違点をまとめておく。

これまで述べたように，-lt によって形成された名詞は，動詞の表す行為そのものやその結果（塩谷 2007: 87 の表現では「行為の過程，結果」）を表す。こうした行為の行為主や行為対象などを表す属格名詞を，-lt による派生語の前に置くことができる。Binnick が挙げた次の例では čölööl-「解職する」[3]の行為対象である「彼」が属格名詞として čölöölölt の前に現れている。

(4) **Tern-ij** **čölööl-ö-lt-ijg** zövšöör-ö-v.
3SG-GEN 解職する-EP-NDS-ACC 許可する-EP-TV.PST
「彼の離職を許可した」（Binnick 1979: 57；引用に際して形態分析，グロス，訳文を追加・変更）

このように (4) において「解職する」と「彼」の間に「行為」と「行為対象」という意味関係が認められることから，-lt に「文」を「名詞節」化する働き（1.2 節で述べた形動詞形に類

[3] Binnick (1979: 57) では čölööl- に対して “resign” という自動詞（「退職する」）としても解釈可能な英訳を付している。しかし，čölööl- の実際の意味や註 4 に示した Binnick の議論の流れから判断すると，「～を解職する」という他動詞としての訳を付した方がよいため，そのようにした。

する働き）を認めることができるとBinnickは指摘している[4]。

Binnick のこの指摘は，-lt の派生元の単位として「語」以外のものも想定する点で本稿と類する。しかしBinnickの主張は，-ltによって形成された派生語の意味（「行為の過程，結果」という，比較的行為そのものの「名詞化」になっていること），及び，行為主や行為対象に相当する属格名詞が -lt の派生語の前に現れうることに着目し，-lt が付加される前の段階（「変形」が行われる前の段階）に「文」の存在を想定することができるというものである[5]。一方本稿では，-lt が動詞に付加される際に，その動詞と関係する語句（動詞の直接目的語や動詞を否定する否定小辞など）がそのまま保持されるかどうかに着目する。

1.4　句に付加されるモンゴル語の派生接辞

モンゴル語には句を単位として付くことができる派生接辞がいくつか存在する。そうした接辞としては，名詞句に付加しうる -taj/-toj/-tej「～持ちの」[6]と -güj「～無しの」がある。また，動詞句に付加しうるものには -gč「～する人・物」[7]がある。(5a) は名詞句 olon xüüxed「多くの子供」に -taj/-toj/-tej「～持ちの」が付いた例である。(5b) は，動詞句 alsyg xar-「遠くを見る」に -gč「～する人・物」が付加された例である。

(5)	a.	[olon　xüüxed]-**tej**	b.	[als-yg[8]　xar]-a-**gč**
		[多い　子供]-PROP		[遠い-ACC　見る]-EP-NDS
		「子沢山の」		「観覧車」（遠くを見るための物）

上述の -taj/-toj/-tej「～持ちの」，-güj「～無しの」，-gč「～する人・物」のような，句に付加しうるモンゴル語の派生接辞の1つとして，-lt を新たに加えることができる。

2.　-lt の句への付加により形成された派生語のうち一般的に用いられるもの

-lt の句への付加により形成され，かつ（ある程度）一般的に用いられている派生語の数は少ない。筆者が現時点で把握している限りでは (1) で挙げた usand selelt「水泳」の他には，xündijg örgölt「重量挙げ」だけである。

---

[4] 1.2 節の表 1 の下で述べたように，形動詞形により形成される名詞節では主語名詞句が（主格と対格の他）属格で現れる。Binnick の主張のように (4) の ternij čölöölölt「彼の離職」が名詞節であるとすると，（形動詞形により形成される名詞節の場合と同じように）属格名詞 ternij「彼の」は čölööl-「解職する」の「主語」となっていることになる。しかし実際には ternij「彼の」は čölööl-「解職する」の主語（解職する側）ではなく目的語（解職されて離職する側）に相当する。Binnick はこの「ずれ」を解消するために，(4) の派生元が受動文（すなわち「彼」が主語になっている文）である可能性を指摘している。ただし Binnick はこれ（派生元として能動文ではなく受動文を想定すること）をあくまで可能な分析の 1 つとして示唆しているにすぎず，実際にどのような変形規則を設定すべきかについては結論を保留している。

[5] Binnick (1979: 56–57) は，（-lt とは別の派生接辞である）-l も -lt と同様のふるまいを示すことから，-l の派生元として文を想定できることも述べている。

[6] -taj/-toj/-tej の詳細については，風間 (1999: 96–102)，梅谷 (2012) を参照。

[7] -gč は形動詞語尾の一つとして分類されることもある。

[8] モンゴル語の「形容詞」は「名詞」の下位範疇であり，格接辞をとりうる。

(6) [xünd-ijg örgö]-lt
[重い-ACC 持ち上げる]-NDS
「重量挙げ」

(6) の xündijg örgölt「重量挙げ」はインターネットや新聞記事で目にする表現であるが，コンサルタント3名（註2参照）に確認したところ，xünd-**ijn** örgö-lt（重い-**GEN** 持ち上げる-NDS；直訳は「重さの持ち上げ」）のほうがより自然であるとの報告を3名ともから得た[9]。まだ定着度が低い表現である可能性もある。

3. コンサルタント調査

すぐ上で述べたように，-lt が句に付加されて形成された派生語のうち，広く一般的に用いられているものは数が少ない。この事実だけからでは，-lt の句への付加は非生産的で例外的な現象であるかのように見える。しかし，(1) と (6) で挙げた例以外にも，様々な句に対して -lt を付加することを容認するコンサルタントもいる。3 人のコンサルタントのうち 1 人は -lt を様々な句に対して付加することに対し，容認度が低かった[10]。しかし他の 2 人からは，-lt が句に付加された様々な用例を得ることができた。3.1 節と 3.2 節では，その 2 名のコンサルタントが許容するデータを挙げる。

3.1 「再帰接辞をともなう名詞＋動詞」に -lt が付加された例

例 (1) usand selelt「水泳」と例 (6) xündijg örgölt「重量挙げ」では，「格接辞をともなう名詞＋動詞」に -lt が付加されていた。この節では，「再帰接辞をともなう名詞＋動詞」に -lt が付加された例を挙げる。なお，例 (7) の gem nügel「罪」（nügel の e は例 (7) では脱落）に対格接辞が付いていない理由は 1.2 節の例 (2) に続く説明を参照。

(7) **[Gem+nügl-ee nuun+daragduul]-a-lt** bol gemt+xereg.
[罪-REFL 隠す]-EP-NDS(.NOM) FP 罪.NOM
「**自らの罪の隠匿**は罪である」

3.2 「否定小辞＋動詞」に -lt が付加された例

この節では，「否定小辞＋動詞」に -lt が付加された例を挙げる。否定小辞 ül は，動詞の直前に置かれる。ül は単独で発話を形成できない点で自立語よりも語としての自立度が低い。その一方で，それ自身がアクセントを有し，また，母音調和によって母音が交替することがない点

[9] 後者，すなわち形容詞・名詞 xünd「重い・重さ」の属格形である xünd-ijn が名詞 örgö-lt「持ち上げること」を修飾する表現は，連体修飾語が名詞に前置される構造である。この構造は，モンゴル語でよく見られるものであり，(6) に比べると特に目を引くものではない。
[10] -lt を様々な句に付加することに対して容認度が低かったのは，註2に記載した3名のコンサルタントのうち，1979 年ウランバートル生まれの女性である。

で，接辞よりかは自立性を有する。ül を語とみなすかどうか（すなわち，「ül＋動詞」全体を句とみなすかどうか）は，ül をモンゴル語の中でどのように位置づけるかに依存し，筆者はこの問題をまだ解決できていない。しかし，ül が接辞より自立度の高い要素であることは確かであり，ここでは ül を仮に「語」としてみなして（すなわち「ül＋動詞」を句とみなして）議論を進める。

この ül が動詞の直前に現れ，それ全体（すなわち「ül＋動詞」）に -lt が付加された例も見られた。以下の (8) ～ (10) を参照。なお (10) は，3.1 節で扱った「再帰接辞をともなう名詞＋動詞」に -lt が付加された例にも該当する。

(8)　Dajsn-y　**[ül　dovtlo]-lt=n'**　bidn-ij　sanaa-g
敵-GEN　[NEG 攻撃する]-NDS(.NOM)=3POSS　1PL-GEN　気持ち-ACC
zovoo-ž　baj-na.
心配させる-CVB.IPFV　いる-TV.NP
「敵が**攻撃してこない**ので我々は心配になっている」（直訳：敵の**不攻撃**が我々を心配させている）

(9)　Ter　xojor　uls-yn　diplomat　xarilcaan-d　**[ül　evler]-e-lt**
その　二　国-GEN　外交　関係-DAT　[NEG 和解する]-EP-NDS(.NOM)
javagd-a-ž　baj-na.
行われる-EP-CVB.IPFV　いる-TV.NP
「その 2 国間の外交関係に**不調和**が進行している（外交関係が悪化している）」

(10)　Tedn-ij　kompani-jn　**[ažil+üürg-ee　ül　güjcetge]-lt-ijg**=n'
3PL-GEN　会社-GEN　[業務-REFL　NEG　果たす]-NDS-ACC=3POSS
zogsoo-x　xeregtej.
止める-VN.NP　必要である
「あの会社の**業務不履行**を止めさせる必要がある」

3 節では，*-lt* を種々の句に付加することを許容する話者から得られた例を挙げた。しかしそのような話者であっても，あらゆる「句」に対する -lt の付加を許容するわけではない。例えば次の例 (11) は（例 7～10 を許容するコンサルタントにとっても）容認度が低かった[11]。

[11] (11) の -lt の替わりに非過去を表す形動詞語尾 -x を用いると，問題なく許容される。
[Zun-y　xaluun　naran-d　coxi-ul]-a-x-aas　sergijl-eerej.
[夏-GEN　暑い　太陽-DAT　打つ-CAUS/PASS]-EP-VN.NP-ABL　注意する-TV.OPT
「夏の暑い日光に打たれること（夏の暑い日光で日射病になること）に注意してください」

(11) ? **[Zun-y xaluun naran-d coxi-ul]-a-lt-aas** sergijl-eerej.
[夏-GEN 暑い 太陽-DAT 打つ-CAUS/PASS]-EP-NDS-ABL 注意する-TV.OPT
「**夏の暑い日光に打たれること（夏の暑い日光で日射病になること）**に注意してください」

どのような場合に -lt の句への付加が許容され，どのような場合に許容されないかは，現時点では明らかになっていない。

4. まとめと今後の課題

本稿では，モンゴル語の出動名詞派生接辞 -lt が句に付加された例の存在を指摘した。-lt の句への付加により形成された派生語が慣習化して広く一般に用いられている事例はごく少数である。この事実からだけでは，-lt の句への付加は非生産的な現象であるようにも見える。しかし話者によっては，様々な句に -lt を付けることを許容する。そのような話者にとっては，-lt の句への付加は新たな語を生み出す生産的な手段として機能している可能性がある。

ただし，3.2 節の最後に述べたように，どのような句に対しても -lt の付加が許容されるわけではない。これには様々な要因がかかわっていると考えられる。例えば，次のようなことが考えられよう：-lt は名詞派生接辞である。名詞の特徴の一つとして，ある事物をカテゴリー化してラベル付けを行ない，当該の事物を他の事物から峻別する働きが挙げられる。ある句に対して -lt をつけて名詞を形成しようとしても，当該の句が表す（であろう）事物にラベルを付す必要性が，何らかの理由でそもそもないことも考えられる。

本稿では 3 人のコンサルタントから得たデータに基づき -lt の記述を行なったが，さらに多くの話者からデータを集めてその特徴を明らかにしたい。

略号

-	affix boundary 接辞境界	NDS	noun-deriving suffix 名詞派生接辞
=	clitic boundary 接語境界	NEG	negative 否定
+	boundary in a compound 複合語内境界	NOM	nominative 主格
1	first person 一人称	NP	non-past 非過去
2	second person 二人称	OPT	optative 希求
3	third person 三人称	PASS	passive 受身
ABL	ablative 奪格	PL	plural 複数
ACC	accusative 対格	POSS	possessive 人称所属
CAUS	causative 使役	PROP	proprietive 所有
CVB	converb 副動詞語尾	PST	past 過去
DAT	dative-locative 与位格	REFL	reflexive possessive 再帰所属
EP	epenthesis 音添加	SG	singular 単数
FP	focus particle 焦点を表す小辞	TV	terminating verbal 終止語尾
GEN	genitive 属格	VN	verbal nominal 形動詞語尾
IPFV	imperfective 未完結		

参考文献

Binnick, Robert I. (1979) *Modern Mongolian: A transformational syntax*. Toronto/Buffalo/London: University of Toronto Press.

Čojmaa, Š. (1997) Orčin cagijn mongol xelnij üg bütex jos [Word formation in Modern Mongolian]. In: C. Cedendamba and S. Möömöö (eds.) *Orčin cagijn mongol xel: Ix deed surguuliudyn bagš ojuutan nart zoriulav* [*Modern Mongolian: For university teachers and students*], 152–200. Ulaanbaatar: Xel Zoxiolyn Xüreelen, Šinžlex Uxaany Akadjemi.

風間伸次郎 (1999)「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」*Altai Hakpo* 9: 93–124.

Önörbajan, C. (2004) *Orčin cagijn mongol xelnij üg züj: Mongol xelnij mergežlijn angijn ojuutan, mergežlijn bagš nar, xel sudlaačdad zoriulav* [*Morphology in Modern Mongolian: For Mongolian language students, teachers, and linguists*]. Ulaanbaatar: Mongol Sudlalyn Surguul', Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'.

塩谷茂樹 (2007)『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』大阪：大阪外国語大学研究推進室編集部門.

梅谷博之 (2012)「モンゴル語の所有を表す接辞」『北方言語研究』2: 47–72.

The Mongolian Deverbal Noun-deriving Suffix *-lt*: Suffix Attachment to Phrases

Hiroyuki UMETANI

h_umeta2@L.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Khalkha Mongolian, derivation from phrases

Abstract

This article deals with the Khalkha Mongolian deverbal noun-deriving suffix *-lt*. In most cases, this suffix is attached to verb bases, as observed in *xögž-* "to develop" → *xögž-i-lt* "development" (*-i-* is an epenthetic vowel). However, a few examples are attested where *-lt* is attached to a phrase. For instance, in *usand selelt* "swimming," *-lt* adjoins a phrase composed of the dative noun *usan-d* "water-DATIVE" and the verb *sel-* "to swim." Although the number of commonly used derivatives formed by the attachment of *-lt* to phrases is limited (the above-mentioned *usand selelt* "swimming" is one among such widely used examples), some Mongolian speakers do attach this suffix to various kinds of phrases indicating that this is not an exceptional process but a productive one, at least to some.

（うめたに・ひろゆき　東京大学）